

Title	モンゴル遊牧民の男女分業：その社会的な地位との関係
Sub Title	On the sex division of labour among the Mongolian nomads
Author	後藤, 富男
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.12 (1955. 12) ,p.934(30)- 950(46)
JaLC DOI	10.14991/001.19551201-0030
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551201-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モンゴル遊牧民の男女分業

—その社会的な地位との関係—

後 藤 富 男

て、それからこれをよじつて一本の長い糸にする。彼らはまた長靴と靴下と衣服を縫う。……彼らはまたフェルトと、住居の被覆をつくる。

男子は弓矢を作り、鎧と馬銜を製し、鞍をこしらえ、彼らの住居と荷車の(骨組みの)大工仕事をやる。彼らは馬群を管理し、牝馬の乳を搾り、コスモス(Cosmos)すなわち馬乳をかきまわし、またこれを入れる革袋をつくる。また彼らは駱駝を監視し、これに荷を積む。男女とも羊と山羊を見張り、ときには男子、またときには女子がその乳を搾る。』

ルブルックの観察は一般にきわめて鋭く、かつ詳細をきわめており、牧民の男女分業についてもその後彼にまさる記述はほとんど見出されないと云つてよい。今日のモンゴル人は、弓矢をもつて狩獵することがなく、王公貴族らが單に祭祀などの儀式用のそれを傳えるにすぎず、馬具はほとんど買賣家と稱する草地に行商する漢人の手で供給され、大工仕事も多くは漢人職人に任せきりであるし、婦人も裁縫には商人から買う糸や針を用いている。けれども、そのよ

中央アジアの遊牧民における男女の分業については、ウィリアム・オヴ・ルブルック(William of Rubruck)はおそらく最も古い観察者の一人に数えられるであろう。一二五三年、ローマ教皇に派遣されてモンゴル皇帝の宮廷に使したルブルックは、往路中央アジアのソルダイア(Solcia)を出發して三日ののち、草原においてはじめてタルタル人(Tatars)に出會つた。これは當時この地方に進出していたバトゥ汗(Batu Khan)の麾下に屬するモンゴル人であると思われるが、ルブルックは、その遊牧の状況、帳幕の構造、酒宴の有様、飲食物、富者と貧者、狩獵、服裝などをこまかに説明してから、彼らの男女間における分業についてこんなふうに記載している。

『二輪車を驅り、これに住居を積みあるいはおろし、バターとグールトをつくり、皮革を仕上げて縫うのは婦人の任務で、彼らは隼から作つた糸でこれをするのである。彼らは隼を細く幾條にもさい

うな、近代になつて喪失した技術や生産活動をのぞいては、ルブルックの敘述はいかにも新鮮であり、男女の仕事が七百年後の今日にもさして變化をみせず、行われていることを思わしめるのである。

それでは、今日のモンゴル族にあつては、どのような仕事かどのように、男女のあいだに分擔されているのであろうか。考察の便宜上、牧民の日常の営みを家畜の管理および衣食住に大別するとともに、まず遊牧的移動をとりだして、この點から考えて行きたい。

二

モンゴル族の牧民の家族が年々季節的に循環移動する遊牧圏はほぼ定まつており、十月ごろから翌年の四月ごろまで駐營していた冬營地を出てから、今年の春も昨年の春とおなじようなコースを辿つて移動しはじめる。そのコースは慣行的にきまつてはいるが、必ずしも盲目的な繰返しではなく、その年々の天候や草生の具合などによつて多少の變動は免れない。また冬營地出發の日取りも、そうした事情に應じて前後する場合のあることは當然である。

このような移動は地形や氣候などの自然環境、家畜の種類・多寡などによつて一様でないが、四月末より移動を開始する中央アジアのカザーク族やキルギス族、酷暑を農業地帯の部落にさけて秋冷とともに移動しはじめるアラビアのベドゥイン牧民、いずれも季節的な移動をすることは揆をおなじうしている。そして、その移動を行うにあつて、遊牧民の主婦が目まわるような忙しさと、激しい肉體的な勞働を要求されることは、いずれの牧民にあつてもかわりはない。

馴鹿を飼養放牧する北方トングース族においては、『遊牧期間には婦人は極めて重要な役割をつとめる。彼女は野營地を去るに先立ち、馴鹿の居場所を見つけ、これに鞍を置き、荷をつけねばならない。夫は野營地に居合わせれば妻の手助けをする。子供たちや手荷物がかると、妻は自分の馴鹿に乗る。……彼女は道をよく知つて居なければならぬし、またこの旅隊を導いてゆく場所をよく知つていなければならぬ。彼女はまたこの時、旅隊から遠く離れて山中で狩獵しつゝある夫や他の者と會う場所を知つていなければならぬ』と報せられている。

北方トングース族においては、今日もなお狩獵がおもなる生産活動の一部門となつていて、男子が頻繁にかつ長期間わが家を留守にする機会が多いので、いきおい季節的な移動にあつても、主婦が自主的に萬事を處理する餘地がきわめてひろい。男子が『狩獵と家畜泥坊』しかしないといわれるアルタイ・カザーク族における主婦の役割もこれに準じ、中央アジアにおけるキルギス族の主婦も男手を借りることなく一切を自分で處理する。一般に狩獵活動がそれほど盛んでなく、もつぱら牧畜をことする場合には、主婦が自主的に處理する餘地はそれだけ狭いけれども、移動にあつて俄かに忙しさを加える點には渝りはない。カザーク族の中央アジア平原に遊牧するものにあつても『ユルトを張つたり疊んだりするのは、女子と貧しい従者の仕事』とされているし、なにごとによらず男子の指圖に盲従して發言をみとめられないベドゥイン族の主婦も、勞役だけは何もかも受持たされて、出發ときまると『いそいで天幕の楔を抜きとる。すると小屋が倒れる。天幕の被覆がくるくると捲か

れ、支柱は一つにまともて束ねられる。こんどは彼女らは家財道具をひきだし、(自分でつくった毛織地の袋につめ)荷物を駱駝につむ。隣から隣へこの様子を見て、まもなくすべての小屋がひろい宿營地から姿を消すのである。』男たちは驢馬で先頭に立ち、劍や銃を鞍にさげて警戒にあたり、女たちは荷物をもつて駱駝に乗る。おそらくベドウィンの主婦たちにとつては、こうして駱駝に乗っている間がわずかな休息の時間であるかもしれない。なぜなら、數マイルも進んで次の宿營地につけば、男子は何もしないで休んでいるのに、彼女らは忙しく天幕をたて、住居をしつらえ、食事の世話をしなければならぬからである。

これにくらべれば、モンゴル牧民の移動においては、帳幕(ger)のとりこわし、牛車への積みこみ、移動の先導、目的地へ着いてからのゲルの組立てなど、今日ではかならずしも主婦のみに任された仕事ではなく、夫もかいがいしく働くのが普通である。ほとんど狩獵と無縁のモンゴルの牧人では、トゥングースやアルタイ・カザークなどのように留守がちではないにしても、馬群などを追つて遠出したたり、牛車の隊をくんで物資の輸送に出かけることはめずらしくない。そうした場合には、主婦は移動の先導をするばかりでなく、豫め夫とおちあう地點を打合せておいて、すべてを彼女が取運ばねばならぬことはいうまでもない。

三

モンゴル族では、夫は主として馬や駱駝など幕營を遠くはなれて放牧する大型畜の監視や管理に任ずる。牧夫は天幕(mashan)を

るので、自分にできなければ近隣の熟練者に依頼し、彼は助手の役割にまわる。また狼害は冬季に多いが、とくにその甚しいときには、十一月ごろ狼狩りを行うことがある。これは單獨ではなく、近隣の男たちが協力するのが普通である。屠殺は、モンゴル牧民の場合には羊にかざられるが、それもつばら男の仕事である。

これに對して、帳幕をあまりはなれない羊や山羊などの管理は婦人に任されている。早春仔畜の生れるときは、牧民にとつて最も多忙なときであるので、男子もとりであるが、帳幕の女たちは夜も寝ないでその世話をする。一般に馬・駱駝をのぞいて、生れた仔畜の世話をみるのは女の役目である。牛・羊・山羊など、一日の放牧から歸つた母畜に一匹一匹その仔をあてがって哺乳させることは、ときに男子もこれをするが、女子の行う場合が多い。家畜は自分の仔以外には授乳しないので、瞬間に一つ一つ母仔を識別しなければならぬが、次から次へ圍いの中にいる仔畜を抱いてその母畜の胸にあてがって間違えることのないのは、かつて旅行の途次はじめて見た我々にとつて大きな驚異であつた。嚴寒に生れた仔畜は、とくにこれを家族とともにゲルに入れて保護し、牛角の尖端を切つて孔をあけた哺乳器を口にあてて乳をのませる。これは老母などの受持ちであることが多い。駱駝と羊・山羊などの剪毛も、男女ともにあたるが、ことに後者は主として女の仕事に屬している。

蒙古高原におけるモンゴル族の婦人が主として小家畜のみの管理にあたるのに對し、男子が犬と鷹をつれていれば狩獵、これらを通じていなければ家畜泥坊ときまつているときえ言われるアルタイ・カザーク族では、家畜の世話はより廣範圍に婦人に屬している。概

モンゴル遊牧民の男女分業

携えてこれらの畜群とともに移動し、簡単な食事を自分で調理して、數ヶ月もわが家に歸らないことがある。彼はまた少年のころから、仔馬を鞍や馬具に慣らし、その調教をする技術に習熟しなければならぬ。馬群のうちから乗用の取換馬などをえらんで捕えるのも彼の仕事である。モンゴル牧民の用いる捕馬竿は、長さ四米ぐらゐもある楊柳または白樺の幹でできていて、その先端に粗革でつくつた直徑二尺ばかりの圓索がついている。五、六キロも重さのある捕馬竿をこわきにかいこんで、馬上に跨るだけでも熟練を要するのであつて、ただ腕力だけでは安定はとれない。しかも馬を全速力で走らせ、脚の締め具合でこれを操作し、兩手で捕馬竿を使うのであるから、それ自體がきわめて困難な作業であるばかりでなく、馬そのものも最も敏捷で伶俐な若駒をとくに索捕馬として調教してあることを必要とする。索捕馬は、數百頭の畜群のうちから今の馬を捕えるかを正確にのみこみ、目的の馬に近づいて牧者が捕馬竿をかまえたとき、ただちに歩度をゆるめてその馬が捕えられるまで倒れないように突張るように訓練されている。

馬群中の初生駒に烙印をおし、牝馬の乳をしぼるのも彼の仕事で、すべて駱駝と馬については一切の世話を男が受持つて女手を変へることはない。さらに羊や牛をふくめた畜群の夜間の監視、ことに暴風雨や吹雪のとき、狼群の出没する闇夜には、家族の男たちは一睡もせず一晩中馬に跨つて見まわり、家畜の逸走をふせぎ、また犬を伴侶に狼の襲撃を警戒しなければならぬ。もし家畜の逸走した場合には、二日でも三日でも休む間もなく追跡してこれ連れもどすのは男子の役目である。馬と駱駝の去勢はことに技術を要す

して狩獵が生産活動の一つとなつていく文化では、家畜管理における主婦の役割は一層廣汎にわたる傾向がある。

たとえば馴鹿を飼う北方トゥングースの主婦は、家畜の管理はほとんど大部分をうけもつのである。『馴鹿の世話は、去勢・屠殺の場合を除けば、婦人の任務の一つとなつていく。』トゥングースは馴鹿をおびきよせるために鹽を使うが、『婦人達は平常鹽の入つた小さな袋即ちダヴァスルク davassuruk(鹽を意味するダヴァスン davassun から出ている)を携帯する』。發情期に馴鹿置場(hare, lewre)を設け牝と仔をかわるがわりに追ひこむのも、分産期に牝畜の世話をみるのも、その乳を搾るのも、遊牧畜群の先頭の馴鹿に跨つてこれを誘導するのも、すべて婦人の役割とされる。もちろん、これに對し男子が全然無關心なわけではなく、わが家にいるかぎり、遊牧單位の先導、馴鹿や馬に荷をつみ鞍をおく作業、男手の要る場合の家畜の世話などは、去勢並びに屠殺とともにその勞を惜まないが、後二者をべつとしては男子は補助者にすぎないのであつて、婦人が主役を演ずるのが普通である。狩獵だけがもつばら男子の仕事になつていくことは、アルタイ・カザーク族をはじめ、東北シベリアの諸狩獵文化と揆を一にしている。

四

家畜と男女分業の問題については、なお検討すべき點が多々あるが、ひとまず牧民の日常における衣食住について、これをみよう。この場合には、一層直接的に家族という場が強調されざるをえない。

『婦人は夫の家族の仲間入りをする、この單位の或る種の仕事を分擔する。彼女が著しく年少であれば、家族の少女がする特殊な仕事しか課せられず、主要な働き手の婦人が彼女を教える。もし成人であれば、彼女は主要な働き手の婦人の仕事をとりか、またはその助手の仕事に従事する。後の場合であれば、彼女は主婦の命令を聴く。助手の婦人は通例、食事の用意をし、水や薪を運び、家畜の世話をし、獣皮の手入れをし、縫物をする。婦人が一人だけならば女の仕事を全部しなければならぬ。子供が出来れば初めて、彼女の生活はその地位に含まれているすべての責任を伴うツングース婦人の普通の生活となるのである。』そして、その女の仕事というのは、家族を維持するいつさいの仕事を含んでいる。けれど、『男子は家庭をもたないし、去勢馬は圍いをもたない』というピラルチェン地方の諺にもあるとおり、圍い(牝馬と仔馬だけを入れる *kurgan*) が去勢馬と無関係なように、家庭はもっぱら婦人のものだからである。

『朝は主婦が一番先きに起きて先ず空の鐵鍋を火にかける。鐵鍋が燦まると、鐵鍋を手早く拭いてから水を一杯注ぎ、磚茶を木製臼で杵を以て搗き碎く。』

お茶の用意が出来ると、主婦は頂の尖った小さい帽子を被つてお茶を煎じ、乳・脂肪・鹽を加えて煮立てる。主婦は先ずお茶の初穂を佛前に供え、第二の初穂を家の外に持出し撒布して諸の神靈に捧げる。

煎じたお茶は蓋のある瓶に移す。瓶のお茶は常に燦かに保つて一日中飲用に供する。』

こうして始まる外蒙古の主婦の一日は、やがて『主人が寢に就く

婦人である」と見てよいのである。

もしそれ家族の食生活に至つては、屠殺した肉の保存、搾乳——馬と駱駝はいずれの文化にあつても例外——から乳製品の加工、日々の調理、燃料の蒐集、水汲み、野生植物の採集など、一つとして婦人の仕事でないものはない。衣料の調製についても同様に見えるであろう。屠畜の毛皮の鞣しは、モンゴル族では男子がこれをする場合が多いらしいが、他の多くの周邊における諸文化では女子の仕事に數えられている。嬰兒や幼児の世話がもっぱら母親のつとめであることはいうまでもない。

五

ここに述べたところは、いわゆる物質的生産における男女分業の範圍をやはずれた行動も含まれているが、きわめて不完全ながら分業の實態についてその一斑を示すものである。これらの諸事實が示唆する問題は數多いが、まず家畜に關して特にとりあげて考えてみなければならぬのは馬であろう。いやしくも馬を飼育している遊牧民においては、馬の管理はほとんど男子の仕事になつている。シロコゴルフが、フルンブイルの北部、すなわちハイラル河の上流・ガン河・デルブル河・ハウル河および一部マレクタ河を包含する地域と、小興安嶺の一部とにおけるツングース族にあつて、馬の世話が婦人の務めの一つをなしていると報告しているのが、狭いわたくしの管見に入るほど唯一の例外であつて、その他のツングースではひとしく男子の仕事となつていたのであり、牧畜活動の大部分が婦人の双肩にかかつてアルタイ・カザーク族にあつ

モンゴル遊牧民の男女分業

のを俟つて主婦は外へ出て日の中で唱名しつつ帳幕を見廻る、見廻りは一時間、若くはそれ以上も續く。』夜まで、家族の中で最も長時間、なにやかやと家内の雑用に追廻されることは、ひとり外蒙古の牧民のみにはかぎらないのである。逸走した家畜を追跡したり、遠出を要する大型畜の放牧や狩獵などにあたる男子は、日常の家事を妻に委ねてほとんどかえりみることはない。蒙古その他の遊牧民を訪れた旅行記などに、牧民の男子はたえず茶をのんでは無駄話に一日をすすますなまけ者のように傳えられがちなのは、一つにはこうした間歇的な仕事の性質によるのである。

移動のさいの帳幕のとりこわし、その牛車への積みおろし、目的地に着いてからの組立てなど、ほとんどすべての牧民にあつて主婦の任務とされ、モンゴル族においてさえ男子がすすんで手を貸すのは比較的あたらしいことで、ルブルックの時代にはこれがもっぱら女子の仕事となつていたことは前述のとおりである。多くは道具類の材料の製作まで婦人の任とされている。北方ツングースの幕居の被覆は、樺の樹皮または獣皮を用いるが、これらの獣皮に手を入れ、樺皮を入念に蒸して、被覆をつくるにはある種の技術を必要とする。その工藝的技術の持ち主は女子である。また、山羊毛や羊毛を紡いで黒色の毛織地に織るベドゥイン牧民の主婦は、さらにこれを天幕の被いに作り上げなければならぬ。七、八人から十人位の人手を要する中央アジア牧民——モンゴル族をふくむ——のフェルト製作には、近所近隣の合力をえて協同に作業するが、男子は主として簀に捲きこんだ細包を騎馬でひきまわす役目を受持ち、多數の勞力を要する羊毛の捲きこみは婦人たちが引うける。やはり主役は

てさえ、婦人は馬の管理には手を觸れないのである。このように、馬の世話がもっぱら男子のうけもつ仕事となつて居るのは、はたしていかなる理由によるのであろうか。

もともと、中央アジア遊牧文化における馬の有用性については、あえて贅言をついやすまでもないが、それにしても現實における經濟的な重要性以上に馬の尊重されていることは、たしかに他家畜に對する評價とは格段の相違がある。これはひとり中央アジアの、いわゆる騎馬文化のみならず、その周邊に連なるベドゥイン族やヤクート族のごときも、馬飼養に不適當な自然條件の下にあるだけに一層顯著である。ベドゥイン族はどうてい馬の飼育の不可能と思われる亜熱帯の砂地において、いわば厄介物のような牝馬を愛惜尊重して、そのためには人間の需要を節して駱駝の乳をのませ、特別に飲料水を運ぶなどあらゆる勞力をおしまないのである。一歳仔の牝馬は少くとも駱駝一〇頭の値打があり、一般の貧しい牧民は一頭の牝馬をも自分の所有になしえないのであるが、これを他人と共有して現在はその三分の一だけ、もしくは前肢だけが自分のものであるとして、何代目かの仔になつて一頭まるまる自己の所有になる日を樂しみにし、あるいは富者の牝馬の飼養を委託され、報酬としてはやがて生れる牝馬一頭を與えられるのを待つて居ると言われる。

ヤクート族もまた、飼料とする牧草の缺乏を獸肉や魚肉をもつて補い、泥土の小屋に嚴寒を防いで辛じて越冬させながらも、一年の半ばは全く役に立たない馬を手ばなすことがない。江上波夫氏は、ヤクートが馬を特別の獸として重んじることは頗る有名であるとして、『以前ヤクートは牛を如何程多く所有していても未だ富者と認

めず、馬畜のみが眞の富力の標準とされたのである』というポドゥブヌイの記述をひき、かつその民族祭或は部族祭として著名な「クミスの祭」(Kumis)を例としてあげ、『要するにヤクトにおいて馬は犠牲獣として尊重され、ある場合はトーテム獣の如く取扱われており、かくて彼らの宗教生活において馬は頗る重要な位置を占めているのである』と述べている。

モンゴル族においても、『蒙古の秘史』に肥えふとつた鬪馬にしばしば言及しているごとく、牧民の最大の誇りは見事な大馬群をもつことであり、社会的な地位は馬群の大小によつて決定される。このような馬に對する評價は中央アジアにおける遊牧騎馬文化のすべてを通じてかわらないと言えるのである。

これらの文化のすべてを通じて、馬の世話がもつばら女子の介在を排して男子の仕事とされていること、馬が宗教ないし儀禮生活においても著しい役割を演じ、現實の経済的な價值以上に偶像崇拜的ともいえる尊重の對象となつていゝこと、また馬のみが「かお」もしくは「體面」の家畜となつていゝこと、これらの一連の事實はたしかに相互に無關係ではない。私は、これらの事實は、元來この遊牧騎馬文化が歴史的に狩獵文化と密接なつながりをもつことによつて、相互に結びつけられていゝと考へる。

今日の草原におけるモンゴル牧民はほとんど狩獵を行わず、その生産的意義はまつたく失われたが、十二、三世紀以前にあつては『單なる遊牧民ではなく、遊牧狩獵民であつた』このことは、今日のモンゴル牧民が羊の肉のほかほとんど肉食をすることがないのに對して、十二、三世紀以前のモンゴル族がすべての家畜の肉ばかり

後、今日まで依然狩獵が重要な經濟活動の地位にある文化はもとより、ステップなどでその意義を失つた場合にあつても、なお馬に對する觀念的な尊重はなくならないのである、狩獵が支配階級の遊戯にすぎなくなつても、いやそうならねばなるほど、馬は貴族と結びつてますますその地位を高める。加うるに種族間あるいは對外的な戰爭に、馬が「表道具」として役立つたのは、つい最近までのことであるから、戦闘員たる男子と馬の關係は、他の家畜とはまつたく異なるものがあつた。ベドゥイン族やソロン族の婦人は馬を乗用とすることさえない。ひとりベドゥインやソロンのみならず、ほとんどの牧馬文化にあつて、女子がいちじるしく疎外されていゝのは、馬が狂暴であつて危険だとか、これに特殊な技術を要するとかいふ理由によるのではなく、遠い過去における狩獵遊牧文化の傳統をひくもののように考へられるのである。

六

右に述べたように、遊牧文化にあつて、馬の管理と飼育がもつばら男子の仕事とされている理由が歴史的なものであるとするならば、兩性における仕事の分擔は果して何を基準として行われたかを改めて検討しなければならぬ。

フォードは、文化を異にするに従つて男女の分擔する仕事がかならずしも一樣でないことを認めて、分業を分つ基準となるものがただに兩性間の生物學的な差異ばかりでなく、一部分は環境の構造の相違に、また一部分はそれぞれの歴史的經驗の不同によるからであると述べていゝ。この提言は、たとえば山羊や羊の剪毛は、ベドゥ

モンゴル遊牧民の男分業

三七 (九四一)

でなく、『如何なる獸類の肉をも之を食ひその病に斃れたるをも嫌わす』と傳へられていゝことからも察せられよう。ルブルックとおなじころ、やはり西方から蒙古の地を訪れたカルピニが、モンゴル人の男子は二、三歳から騎馬を習ひ、弓矢のほかには關心をいだかないと述べていゝのも、たまたま右の事實を裏書きする觀察であるといえる。今日においてもアルタイ・カザーク族の生活のごときは、このカルピニの記述を彷彿させるものであるが、これらの點にかんがみて、一般にすべての遊牧騎馬文化において、歴史的に遡れば遡るほど、狩獵の生産的意義は大であつたと考へられぬのである。そして、狩獵の生産的意義が大きければ大きいほど、男子の活動は主として狩獵に吸収せられ、牧畜部面における婦人の活動は廣汎にわたるのである。通説によれば牧畜活動は男子の分擔であるとしていゝけれども、狩獵を行わないために、男子がうけもつ牧畜活動の比較的ひろいモンゴル族と、狩獵活動のさかんな北方トゥングースやアルタイ・カザークにおける婦人の廣汎な活動については、さきに述べたところからおのずから明かである。

ここに、牧畜一般が狩獵とふかい關連を有するにもかかわらず、しかも生産活動として背反的な意義をもつていゝことが窺われる。しかるに、この間において、馬だけはその家畜化が行われて以來、狩獵——種族闘争や襲撃にも——の最大の武器として、おのずから別個の地位を占めていた。馬は、少くとも騎馬といふことが行われはじめて以來、狩獵——ことにステップにおける叁狩り形式の——にとつて不可欠な家畜であつた。言いかえれば、馬文化は狩獵複合の一要素として、當初より男子と結びつていゝと思われぬ。その

イン族では女子のみがこれを行うが、モンゴル族では女子だけでなく男子も従事し、燃料とするアルガリ(家畜糞)拾ひは、モンゴル族では女が、ソロン族では男がやる等々の事實に關していわれたものである。けれどもフォードが、分業を分つ基準を、生物學的な性の區別だけでなく、それぞれの文化における歴史的傳統と環境構造とも求めていゝ點は大いに注目しなければならぬ。とはいへ、これらの三つの要因は個々別々にそれぞれはたらいて男女分業を決定するものであろうか。フォードはそれについて何も説明してないが、遊牧民における分業にかんがみて、つぎのように考へられるのである。

およそいかなる文化であらうと、嬰兒の哺育や家族の衣服・食物の準備のごときは、すべて婦人の仕事とされていゝ例外はない。婦人が分娩という役割を通じて、子供の直接の養ひ手であり、したがつて子供を對象とする一連の行動群が婦人のものとなつていゝことは、あらゆる文化を通じて共通である。ゆゑに生物學的な性のちがいは、何としても「性別による」分業を分つ第一の基準とみるべきである。日々子供を養育せねばならぬ母親は、一日といへども家を留守にして狩獵し、あるいは遠方への旅行に出ることはできない。

このため、住居を中心とする日々の生活の営みは、いわば子供を對象とする諸行動の擴張として婦人の受持ちになつたといふ考へ方には反對すべき理由はない。つまり哺育の必要と、それに伴つて家を離れない、いや彼女自身が「家」であるといふ事實が、婦人における行動の或る複合を形成するのである。

しかし、出産と哺育という生物學的な機能でさえ、これを中核と

する人間の行動には生物學的ないし本能的なものが直接あらわれているのではなく、つねに社會的な、もしくは文化的な媒介を経ている。始原文化にあつてはそれが比較的純粋にあらわれていたとしても、階級社會に入るとともに、男性であり女性であることによつて要求される諸行動には、それぞれの文化によつて異なる意味と評價が付せられており、社會内部に占める男女の地位と結びつけられている。そこにはすでに男性の占める位置と女性の位置とができていて、その位置がそれぞれに特定の行動を要求するのであるが、それらがあたかも男性であり女性であるがために當然行ふべきものであるかのごとく看做されるに至つたのである。

思うに、いかなる單純な文化にあつても、その社會の成員がすべて一様にあらゆる様相に觸れ、その要求する一切の行動を各人が行うことはできない。個々人がその占める社會内での位置に應じて要求される行動は、相互に補完統合されて一つの機能する全體としての文化を形成するのであるが、いやそうであるからこそ、各人に屬する行動系列は同一ではありえないのである。階級社會にあつて人々の位置は、生産手段の所有關係とか、身分とか、年令とかによつて定められ、相互に複雑に絡みあつて表現されるのであるけれども、男女の性別はその最も根原的なものであつた。してみれば、その相違によつて社會的に許容され命ぜられる行動は、じつは經濟部面における生産行動、いうところの男女分業にだけ限られているわけではない。反對に、その位置により決定づけられた一連の行動のうち、生産行動のみをピックアップしたものが男女分業と名づけられているのであつて、實はこれだけを切離して論ずるのは當をえた

ものではないのである。故に、男女分業が經濟外的な要因によつて規定されることの多いことは、これを認めなくてはならない。シロコルフが『一定の興えられた條件の下では、單位内で行われている分業は人間の活動力の最高の利用という原則に基いている』と述べているのは、必ずしも男女の分業が合理的な打算によつて定められたことを意味するものではない。

これらの分業を擔當する男女は當然ばらばらで無關係な立場にあるのでなく、その行動を通じ、社會内部で結合統一されねばならぬことは既に明かである。『男女分業がいかなる形態をとろうとも、それは、一方の性によつて行われる仕事は他方のそれを補足するように働く』³¹⁾のであり、分業は他面において協業にほかならない。しかしして、自然家族が社會における最小の基本的な單位をなし、その内部において生産と消費の經濟循環の行われる場合には、すなわちその結婚關係を通じて形成される家族が一次的な統合の場となる。モンゴル牧民の社會にあつても、いまだ配偶者をもたぬ、あるいはそれを失つた獨身者もあり、ラマ僧侶のように寺廟にあつて戒律の下にある程度隔離された生活をよぎなくされる人々も少なくないが、それらはいずれかの家族に包含され、あるいはそれと關係をもつ程度に應じて、この分業に補助的な役割を演ずるのである。

七

男女間の分業が單に生物學的な機能の相違にもとづくものでなく、社會内部に占める兩性の位置の命ずる社會的行動の分擔であるとすれば、その統合の場において、男または女のいずれか一方の意

思が支配的にはたらくことが當然豫想される。

クーンおよびチャップルは、人間の行動が反覆せられることによつて、やがて習慣的な諸關係ないし制度が形成されるものと考え、その角度から個人のあいだにおける能動 (origin of action) と反應 (response) を分析し、個人間において相互に順應する過程を「働きかけあい」(interaction) と名づけている。働きかけあいの發生する場 (events) は、(1)二人の場 (pair events) と、(2)三人またはそれ以上の場 (set events) とに區別されるが、その場合いずれの場にあつても一人が能動的に行動し、他の一人または多数が被動的にこれに反應するのである。各個人は、それぞれの状況において、習慣的な働きかけあいの型 (pattern) を有するのであり、それによつて彼のパースナリティが形成されるものとする。一人と、他の一人またはそれ以上の間に、習慣的に能動・被動の關係が成立しているとき、そこには指導と被指導との關係がみとめられるといふのである。³²⁾

このような關係が、はつきり認められるようになるのは、階級ないし身分社會に入つてのちのことである。男女間においても、分業がただ生物學的な相違にのみ基づくものであれば、能動と反應の關係は固定されるわけではないが、社會内部に占める男女の地位に差等を生ずるに従い、一方はより多く能動的に、他方はより多く被動的とならざるをえない。これは一見原因と結果を倒錯しているように思われるけれども、習慣的に能動、もしくは習慣的に被動ということは、少くとも兩性間の關係においては、個人的能力の差によるものほか、元來平等な社會的地位にある場合には生じえないのであ

る。クーンおよびチャップルの所説は單に個人間の關係を説明するにすぎず、何故に習慣的に能動または被動に出るかという社會的な根據にまで觸れるものではない。

遊牧民の婦人が物質的生産をはじめ日常の生活に、きわめて積極的であり、かいがいしい働きをみせていることは前に述べたとおりである。ハンティントン³³⁾は天山高原に遊牧するキルギス族の婦人について、彼らが家畜の管理や移動の仕事のほとんどすべてをやつてのけることを記し、従つておなじく回教を奉ずる農耕社會の婦人に比し著しく自由であり、殆んど男子にゆずらぬ高い地位を享有するとして、その一流の考え方でこれを地理的影響によつて説明しようとして³⁴⁾いる。しかるにこのおなじ遊牧民の婦人の地位について、全く相反する見解が行われている。たとえばラドロフは『妻は夫に完全に從屬している。彼女は夫の名をよく呼びえない。……そして男の前で頭をあげない』と述べているのである。事實、シュミット等の説くように³⁵⁾、すべての牧畜文化にあつては父家長制が行われており、また特別な場合をのぞいて、花嫁が持參する婚資としての家畜³⁶⁾以外、家畜の所有者は男子——一家族の父たり夫たる男子であるのを通例とし、その財産は息子に譲られている³⁷⁾。この事實は當然家族内部における婦人の地位を決定すべきはずであるのに、ハンティントンのごとき見解の生ずるのは何故であらうか。

『モンゴルの婦人が、きわめて多くの種々な場合に、男子と同等であるかのように見えるのも、自由というよりはやはり地位である。長年の習慣によつて、こみいつた仕事も気軽にやつてのける風があるの、婦人は獨立的であるように見られよう。遊牧民の婦人

は他のアジア的な社會では男子の仕事になつていく多くのことをやり、しかも遊牧の生活では男子はしばしば家を留守にしているの
で、彼女はそれを命ぜられなくとも責任をもつてやつてのける。こ
のことが男子の相談ごとや話し合いに或る程度口を入れる権利を彼
女に與えることは當然であるが、こゝでもやはり機能と地位との重
なりあいには平等とは同じものではない。』

遊牧民の主婦があえて夫や家長の一々の命令をまつことなく、着
々と自主的にその仕事をかたづけに行くのは、實は社會的な通念ま
たは慣習によつて、その地位に屬せしめられている範圍を出でない
のである。それすら廣狭のあることは、トゥングースとベドゥイン
の主婦を比較すれば明かであるが、いずれにせよ、婦人の行動がそ
の「分」に應じたものであることにはちがいない。その「分」に應
ずるといふこと自體が、婦人の從屬的地位を明かにものがたつてい
るのである。

遊牧民の諸文化において、生産活動としての狩獵の意義が大であ
るほど、男子の活動はそれに吸収され、婦人の牧畜活動における分
野のひろくなる傾向のあることについてはさきに指摘した。そし
て、もし遊牧文化にあつて歴史的に遡るにしたがつて狩獵の重要性
が増大するとすれば、婦人の牧畜活動は元來きわめて廣汎であつた
と考へざるをえない。されば、男女の社會的地位が、いずれが主な
生産者であるかによつて決定されるとすれば、グロッセが、『遊
牧民の富はその畜群から成つてゐるが、家畜の飼育は男子の特權で
ある。その結果この貴重な財物はすべて男子のものとなり、婦人は
財産をもたず無力で男子に對してゐるのである』とする、その理由

意を求めることなしに最後の斷を下す』のが普通である。もとより
實際問題としては、老人たちや妻の意見も徴せられるであろうし、
妻の主張どおり行われる場合もあるが、それは個々の家庭ないし
その時々々の事情にもとづく個別差によるので、社會的な慣行として
は家長としての夫の決に俟つべきものとされている。

北方トゥングース族の場合には、男子の專斷がそれほど明かに傳
えられていないが、狩獵に出ている夫の居場所が移動の時期と方向
を決する一要件となつてゐることは確かで、事前に夫と打合せをし
て決せられることは、シロゴルフの記述からも窺いうるのである。
しかもこれは狩獵活動の活潑な文化における、いわば例外的と
もいふべき場合であり、狩獵の意義が乏しくなればなるほど、牧畜
活動における自主的宰領という面から、女子は退けられるに至つて
いる。

アラビアの沙漠に住むフェジール・ベドゥイン族は、それぞれシェ
イフ (sheikh) を中心にして、ふつと五〇ないし一〇〇の世帯が一
團となつて遊牧する。この移動 (sawta) を指揮するのは、親族群
のうち支配的家族の長であるシェイフである。集團が牧地に着くた
びに、その主だつた男たちが毎日シェイフの帳幕にあつまつて、牧
地の状況や集團のできごとなどについて話しあう。集團が移動する
方向は年々大體一定しているが、現實にいづつ、どこへ動くかはこの
席上で相談され、シェイフの指揮にしたがうのである。ときにはシ
エイフが獨斷で、他の人々に知らせることなく出發の準備にかかる
ことがある。ベドゥインの主婦たちは、いつもシェイフの帳幕に注
意してゐて、朝になつて移動の氣配が察せられると、ただちに自分

モンゴル遊牧民の男女分業

としてあげてゐるところは誤つてゐるといふなければならぬ。そ
れにも拘らず、グロッセのひきだした結論は、今日すべての遊牧文
化を通じて安當するのである。

八

しからば、牧民社會において、何故家畜は男子のものとなつたの
であらうか。ここにふたたび彼らの男女分業のあり方が検討されな
ければならぬ。彼らのあいだで、馬の飼育管理がもつたら男子の仕
事となつてゐる事實はさきに注意したが、おなじように婦人の立入
りをゆるさないものに、遊牧的移動の計畫と決定、家畜の屠殺およ
び去勢がある。

遊牧的移動は、前述のように、年々盲目的な繰返しでなく、冬營
地出發の日取りやコースに多少の變動があるが、それらは牧地の下
檢分や収夫の報告などにもとづいて、草生や水利の状況を考へて決
定されるのである。

中央アジアにおけるトルコ系のカザーク族においては、『移動は
外部の牧地に出ている牧馬夫の報告にもとづいて決せられ、その計
畫はしばしば他人には秘密にする。世帯をたたくと人目につかない
ようにして出發する』のであり、各アウル (世帯) がその出發の時
期や選ばれた方向をできるだけ秘するのには、目的にかなう夏の遊牧
地を先に占めるためである。これはおなじ地方にあるキルギス族も
同様で、この計畫を決定するのはひとり家長である夫もしくは父で
ある。

モンゴル族にあつても、こうした移動の計畫には、『夫は妻の同

の帳幕を撤し荷造りをして、移動の準備にかななければならぬ』
ベドゥイン族の場合には、主婦が移動について一言の相談もつけ
ず、その指導に盲従するばかりでなく、男たちもその意見を集會
(mashai) に反映させることはできるが、すべてシェイフの決斷に従
わなければならぬのである。

つぎに、家畜の去勢と屠殺も、すべての遊牧文化を通じて一様に
男子の仕事となつてゐる。それには、一つにはこうした手荒らな作
業が危険を伴ない、或は殘酷であるという理由もあるかも知れな
い。けれども、思うに去勢は種を斷つことであり、屠殺は生命を斷
つことである。この両者が淘汰の技術として、野生種の家畜化に決
定的な役割を演じたことについては、稿を新たに考へ察するつも
りであるが、そこには、將來畜群の存續の上に有用なものを残し、
無用のものを排除するという、全般的な見とおしの上に立つ選擇が
當然にはたらかざるをえない。

『この羊はもう乳を搾れないとか、羊毛を刈らねばならぬとか、
屠殺する時期がきたとか決定を要することは、普通遊牧民のあいだ
で重大な責任を伴うのである。當然にこの決定をするのは家族の長
である。現實に殺すということは、死がいいかげんに扱えない危険
なものであり、ある一頭の羊から他の群全體に波及してはならない
ものである。正當な形式と戒律をもつて家長その人のなすべき
ことである。』

モンゴル牧民が行う唯一の殺生は食肉とする羊の屠殺であるが、
それに嚴重な方式と宗教的な儀禮の伴つてゐるのは、とりもなおさ
ず牧民にとつて輕卒をゆるさぬ生活上の大事であるからに他ならな

い。なるほどその肉は食料として缺くべからざるものであるが、そのうであるだけに家畜は大切であり、その饒多をこそ祈念すれ、減少はできるだけ食い止めなければならぬ。いわば食肉のための屠殺は生活上の必要悪であり、最低限にとどめなければならぬことである。

去勢もまた、やはりおなじ慎重と考慮と選擇を要する大事である。群の統一をみだすような氣荒らな、あるいは飼育の目的にてらして無用・劣等な種を断つて、より有用で優秀な畜群に仕上げる事が、牧民の大きな目的であることは改めていうまでもないであろう。

これらの三點は、單なる機械的もしくは肉體的な作業ではなく、いわば牧畜經營上におけるキイ・ポイントであり、企畫者ないし指導者としての働きを要求する。この三つが男子の仕事となつてゐるのは、單におなじ水準における相互に補足的な仕事の分擔と見るべきではない。彼はこの三點を掌握することにより、他の肉體的な雑務はすべてこれを婦人にまかせても、なおかつ牧畜經營を支配し、家畜の所有者たる地位を確保するのである。

グッドフェロウは、アフリカのパントゥ族の家族内に行われる男女分業について觀察した上で、『併しながら、各家族の長は特別な機能を有している。彼は他の多くの成員たちの仕事を調整しなければならぬ、かれに明確な經濟的責任を附與し、また一夫多妻の世帯にその特別の經濟的資格を附與するものは、この機能である。これを通じて、世帯は眞の經濟的單位として機能する』と述べ、またべつの個所でこれを『家長の企業者的役割』と稱している。遊牧民の

生産において、移動の決定と屠殺と去勢とは、まさに企業者的役割の基本的な要因と考へなければならぬ。すべての遊牧民文化を通じて、この三つの行動が例外なく男子のものである事實は、とりもなおさずその社會内における男子の地位を決定し、父家長制を成立せしめた原因であると考えられる。

次に、それでは、遊牧民にあつてこれらの役割が、何故男子の握るところとなつたか、という點について検討しなければならない。

九

遊牧民は何故に遊牧するか。ラティモアのいうとおり、遊牧的牧畜は夏の牧地と冬營地との均衡の上に成立するのであり、季節に応じてよい草と水とを求めて動くのであるが、かかる移動が可能であるのは、牧畜の對象となる家畜が本來草食性で群れを構成し、草原を移動する屬性をもつ有蹄類であるからである。もともと森林動物である豚が、遊牧民の家畜から除外されている事實によつても、そのことは明かであろう。

ところで牧畜は、新石器時代になつて初めてあらわれたとされている。⁽⁴⁹⁾いま、ここに家畜化の契機について詳しく論ずる餘裕はないし、またその必要もみとめられないが、家畜は私有財産の制度と切離してはその存在を考へることはできない。

アジアのこの地域においては、古くより有蹄類が狩獵の對象となつてきたにちがいない。トゥレチャコフは、アジア北部におけるオスチャック人やヴォグル人などの狩獵の歴史的發展について分析し、その前階級社會において行われた集團狩獵と、階級社會以後に

みられる個人狩獵との、社會經濟的な意義の相違を強調している。⁽⁵⁰⁾獲物を個人の所有に歸せしめる個人狩獵は、交易關係のある程度の流入をまつてはじめて發展しうる。草原にあつて特定の生活圏をもつ有蹄類の群れも、それが集團狩獵の對象としてのみあつた始原社會以後、やがて特定の群をつねに追尾する個人狩獵とのあいだに所有の關係がみとめられるにいたつたにちがいない。狩獵民の「遊牧」と牧畜民の「遊牧」とは勿論性格を同じうするものではないが、その相違を來たした最大の契機は私有財産制の發展によるものであり、技術的には兩者の脈絡を否定することはできない。同様にして去勢はこの過程にはじめてあらわれて家畜化を促した契機となつており、屠殺にいたつては獲物の絶滅を避けて個人狩獵者がすでに選擇的に行い來つたところであつた。

これらの技術は、牧畜文化にとつて、いわば前代からの遺産であつたのであり、狩獵複合を構成する行動の一部として、ひきつづき男子の領域に屬していたと考えられる。けだし、狩獵社會にあつて女子は例外なく狩獵活動から疎外されており、その生産活動はもっぱら植物的資源にかぎられていた。したがつて家畜化の進行過程において、これらの役割が男子の手中にあつたことはきわめて自然であり、家畜は男子の所有となつたのである。

牧畜の成立以後、家畜の世話や搾乳など多くの仕事が婦人のものになつたが、牧畜經濟を成立させるキイ・ポイントというべき遊牧的移動の指導と、去勢・屠殺に伴う選擇との責任は、ついに婦人の握るところとならなかつた。これらの行動は、牧民家族の生産活動における組織計畫指導の職分を象徴するものであり、企業者的役割

の具體的なあらわれである。遊牧民社會における父家長制は、かかる現實的諸條件の上に成立したと考へられるのである。

いかなる社會あるいは文化にあつても、男女の間に仕事の分擔が行われていることは普遍的な事實であるので、この問題は夙に多くの社會學者や民族學者の注目するところとなつてきた。モンゴル牧民の社會にあつても、乳製品をつくり羊毛を刈るなど、日々衣食住の手段を獲得するために物質的生產に従う人々は、他ならぬその社會のうちに特定の地位を占め、文化の種々なる様相において日常相互に働きかけあつてゐる男女であり、その間の分業はいろいろな分業または専門化のすべての形態を通じて最も根源的なものといえるであろう。

併しながら、いわゆる未開社會について多くの研究が行われて來たにも拘らず、なおこの問題は解決しつくされたとはいえない。けだし、その大きな理由はやはり資料の不足にあるのである。遊牧諸文化についてはとりわけそれが著しい。ことに我々の對象とするモンゴル牧民については、それが「文字ある」(Escribed)文化であつて、民族學者・文化人類學者の興味の外にあるため、さきに觸れたようにルブルック以來これにまさる觀察はほとんどないと言へるのである。

男女分業については、なお幼少年期における男女それぞれの行動あるいは技術の學習、宗教的・儀禮的な諸行動における區別、男女のいずれか一方に禁ぜられている行為上のタブー、それに關連して分業上異性の手出しを許さぬ行動の種類と性質など、おそらくこの

他にも検討すべき諸問題は多いのであるが、それらについてはこれを他日に期したいと考ふる。

- (1) W. W. Rockhill, "The Journey of William of Rubruck to the Eastern Parts, 1253-55" (洛克希爾譯註『魯勃洛克東遊記』文殿閣影印版・民國二六年) p. 75.
- (2) シロコゴルフ『北方ソングラスの社會構成』(川久保悌郎・田中克己氏邦譯) 昭和一六年・五一七頁。
- (3) O. Latimore, "Mongol Journeys," 1941, p. 153.
- (4) E. Huntington, "The Pulse of Asia," 1907, p. 130.
- (5) C. D. Forde, "Habitat, Economy and Society, A Geographical Interpretation to Ethnology," 1950, p. 337.
- (6) C. M. Doughty, "Travels in Arabia Deserta," reprinted 1924, vol. I, p. 216.
- (7) ヲロンン『蒙古風俗誌』(高山洋吉氏譯) 昭和一四年・一〇〇頁參看。
- Huntington, *op. cit.* p. 114. こもキルギス族の捕馬等について簡単な説明がある。
- (8) シロコゴルフ前掲書五八頁。
- (9) 同上書六二頁。
- (10) 同上書五〇一頁。
- (11) 同上書五一五頁。
- (12) 同上書五一五―一六頁。
- (13) カズローン『ノイン・ウラよりハラ・ホトへ』(播磨倉吉氏譯)『善隣協會調査月報』第七七號(昭和一三年一〇月)所收

に狩獵の鷲とグレイハウンドをもち、盛んに狩獵を行うのに反し、モンゴル族はこれを使用することがない。東部内蒙古では狐狩りに鷹と犬を使うことがあるが、興安嶺以西の草原に住むモンゴル族は若干の齧齒類、および家畜に害を與える狼をのぞいて、ほとんど狩獵をしないと云つてよ。

- (25) ス・ヤ・ウルヂミルツォン『蒙古社會制度史』(外務省調査部邦譯) 昭和一六年・九〇頁。
- (26) トーノン『蒙古史』(田中萃一郎氏邦譯・岩波文庫版) 上巻六〇頁。
- (27) W. W. Rockhill, *op. cit.* p. 76. 註c。
- (28) C. D. Forde, *op. cit.* p. 171-2.
- (29) 上牧瀨三郎氏『ソロン族の社會』昭和一五年・五二頁。
- (30) シロコゴルフ前掲書五〇二頁。本文引用中『一定の與へられた條件の下では』とあるが、「は」を削るべきではなからかと考ふる。
- (31) M. J. Herskovits, "Economic Anthropology, A Study in Comparative Economics," 1952, p. 141.
- (32) E. D. Chapple and C. S. Coon, "Principles of Anthropology," 1946, pp. 37-8.
- (33) E. Huntington, *op. cit.* p. 128.
- (34) W. Radloff, "Aus Siberien," 1884, I Band, S. 314.
- (35) 「文化圈説」によれば、原段階(蒐集經濟)は第一次段階に移行し、農耕・牧畜・大狩獵の三經濟形態に分れる。狩獵から牧畜への發展に際しては男性の力に負うところ多く、男性は社會

モンゴル遊牧民の男女分業

- ・六四頁。
- (14) 例えばブルジェヴァリスキー『蒙古と青海』上巻(田村秀文・高橋勝之氏譯) 昭和一四年・七三―一四頁。
- (15) シロコゴルフ前掲書五〇一、五〇八頁。
- (16) C. M. Doughty, *op. cit.* vol. I, p. 225.
- (17) キルギス族においても『皮の製鞆及び踏付、製靴、毛氈の被蓋の組立や染色、紡織など、これら仕事のすべては概して婦人の負擔である。』(ハインリッヒ・クノッ『中亞遊牧民の經濟的文化』——『一般經濟史』第一卷第二〇章——高山洋吉氏譯『善隣協會調査月報』第五八號所收・昭和一二年四月・四六頁。)
- (18) シロコゴルフ前掲書六九頁。
- (19) C. D. Forde, *op. cit.* p. 316.
- (20) 江上波夫氏著『ユウラシア北方文化の研究』一九五一年・一六三頁。
- (21) 同上書一六四頁。
- (22) 『蒙古の秘史』(小林高四郎氏譯註) 昭和一六年・四一、七七、一四〇、一四九頁等參看。
- (23) 「……馬のみは別で、貴族的家畜といはれるやうに平民は事實多くを持たぬが、牧民の誇として多々ますます喜ぶ傾向がある。金錢に換算すれば大きな財産であるが、彼らはむしろ賣却を欲せず、多數を持つといふことに誇を感じてゐるやうである。』(拙著『蒙古の遊牧社會』昭和一七年・四五頁)
- (24) 例えばアルタイ地方には、回教を奉ずるトルコ系のカザーク族とモンゴル族とが入り混つて居住するが、前者が殆んど各戸

的優位をかちえ、鞏固なる父權社會が發達する。(棚瀨襄爾『文化人類學』昭和二五年・七一―八〇頁參看)

- (36) 五七四頁、四四八頁。例えばシロコゴルフ前掲書。
- (37) シロコゴルフ前掲書五八一頁、上牧瀨三郎氏前掲書五五―七頁。
- (38) O. Latimore, *op. cit.* pp. 205-6.
- (39) エルンスト・トクローセ『家族の形態と經濟の形態』一八九六年(『善隣協會調査月報』第五九號) 四六―七頁。
- (40) C. D. Forde, *ibid.*, p. 334.
- (41) ハインリッヒ・クノッ前掲論文『善隣協會調査月報』第五八號・五〇頁。
- (42) フルンシュエツァリスキー前掲書九〇頁。
- (43) C. M. Doughty, *op. cit.* vol. I, p. 216.
- (44) O. Latimore, *op. cit.* p. 188.
- (45) D. M. Goodfellow, "Principles of Economic Sociology, The Economics of Primitive Life as Illustrated from the Bantu Peoples of South and East Africa," 1939, p. 145.
- (46) D. M. Goodfellow, *ibid.* p. 79.
- (47) O. Latimore, *op. cit.* p. 179.
- (48) 今西錦司氏『遊牧論そのほか』昭和二三年・四七頁以下參看。
- (49) 牧畜については、農業起原説・狩獵起原説があつて、未だ必ずしも定説はないが、いずれにせよ新石器時代の晩期に現われ

四五 (九四九)

たとわれない。例を以て Gordon Childe, "What Happened in History," reprinted 1952, p. 48 以下参照。

(9) K. ヒム・ツレチヤコフ『北部アジアにおける原始的狩獵(上)』(田村秀文氏譯『善隣協會調査月報』第七五號・昭和一三年八月所收) 四九—五八頁。

(10) M. J. Hershkovits, op. cit. P. 132. 同書に於て Grass, Buxton, Durkheim, Kaberry, Malinowsky, Thurnwald 等々の見解をあげてゐる。

書評及び紹介

久武雅夫著

『数理經濟學原理』

最近の理論經濟學は數學の知識なくしては、その完全なる理解は不可能であり、しかもいわゆる數學の著書は物理學への應用が主として説かれてゐるため、經濟學を志す人々にとつて應用面への興味を懷せることが少なく、經濟學と數學の遊離が屢々問題とされてゐる。幸いにして最近數年間は經濟學を學ぶ人々のために著された經濟數學の著書が比較的豊富になつてきたので、この困難は次第に除去されつつある。しかし数理經濟學の發展自體が日進月歩の状態にある以上、これを解説すべき經濟數學の著書もその内容を新たにする必要がある。ここに擧げる久武教授の『数理經濟學原理』はまさにかかる要請に應えたものであり、著者はその序文において「現在では數學記號を使用しない經濟理論に關する論文の方が稀少性を持つと云う位になつてきた。しかしその反面に數學分析がその本來の經濟的意味を離れて獨走する危険が見えないでもない。……これ等の制約にも拘らず數學的方法の重要性は未だ十分認識されてゐるとは云えないし、經濟現象の複雑な因果關係を説明すべき役割はむしろ今後に期待される。」と述べて居られる。本書はかかる立場から

現代における数理經濟學の諸問題を解説したもので、靜學的分析、互視的理論と微視的理論、需要の理論、生産者均衡、線型計畫、交換の均衡、投資と所得、貨幣分析、加速度原理、成長率の問題等が收められている。

第一章では資本主義經濟の基礎としての私企業の意義、靜學と動學、比較靜學と安定の條件等の諸概念に對して簡單な説明が與えられる。第二章では先ず諸變數とグループの可能性の關係が説かれ、個々の函數關係が種々雜多でもそれ等を綜合した關係は安定してゐると云う場合には互視的な函數關係が成立する。かくして平均人的思想が成立し平均人の行動を社會全體の運動の縮圖と見做すことが可能となる。經濟體系を表わす方程式が一次式で表わされてゐる場合には、マトリックスの使用によつて連立二次方程式を解くことができる。次で合成財と部門分割の問題がとり上げられてゐるがこれ等の記述は第三―第五章の理論的展開の伏線をなすこととなる。第三章「需要の理論」ではヒックス、アレン型の無差別曲線論が説かれ、その數學的展開から安定の條件が導かれる。更にこの理論から支出擴張線が引き出されエンゲル法則と消費の所得弾力性の概念が説明される。これ等の検討を終えた後需要曲線の問題に入つてスルーツキーの基本方程式を出發點として需要函數、需要法則の數學的表現が與えられる。

第四章「生産の均衡とその變動」では、固定資本、經營資本、流動資本等の諸概念に説明が與えられた後、生産函數——限界生産力を數學的に表現し、限界生産力均等の方程式が導かれる。更に生産物乃至生産要素の價格變化の影響を論じ、生産係數の變化に及び、